言語管理理論における管理プロセス再考

――規範の動態性，管理プロセスの循環性と非共有性，及びミクロとマクロの往還――

加藤好崇

1. はじめに

人と人とがインターアクションを行う場面では様々な問題が生じる。そのような時，インターアクションの参加者は問題を放置する場合もあれば，何らかの方策を用いて問題解決を行おうとする場合もある。文化を異にする者同士が参加する接触場面では，一層，多様な問題が生起し，その解決方法も複雑になる可能性が高い。

異文化の者同士が参加する接触場面において，人々はどのような意識を持つのか，インターアクション問題に対してどのような対策をとるのか，あるいはとらないのか，さらに問題の背景にある規範とはどのようなものなのかについて説明をする枠組みが，言語管理理論の管理プロセスと言える。言語管理理論は Jernudd & Neustupný（1987）らによって理論化され，これまで多くの接触場面分析の理論的枠組みとして利用されてきた。

この管理プロセス（図１）とは言語面，社会言語面，社会文化面の規範の想定から，規範からの逸脱，逸脱の否定的評価を経て調整行動に到るまでのプロセスのことを指し，接触場面に

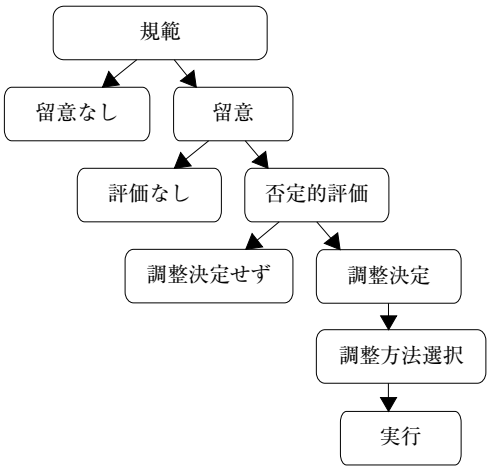

図１　管理プロセス

おけるインターアクション問題を明快に説明することができる理論的枠組みと言える。

また，表面化せず参加者が頭の中で感じている問題の存在を指摘している点も重要である。つまり問題は必ずしも可視化されておらず，それをフォローアップ・インタビューなどの手法によって可視化する必要性が論じられている。さらに，この可視化された問題点を接触場面参加者に伝達し，より問題を少なくしようとする教育的立場に立った試みが論じられることもある。

しかし，管理プロセスに対する批判もあり，本稿ではいくつかの問題点から管理プロセスについての再考を行っていきたい。まず，規範の動態性についての分析が不十分だという問題点がある。Neustupný（1985）は規範の動態性についてすでに触れているが，まだ十分なものとは言えない。規範の動態性がどのような規則を持って生起しうるかを理解できれば，管理プロセスは接触場面における説明概念としての機能だけではなく，どのような言語行動が生起しうるかを予測する概念ともなり得る。

次に管理プロセスの循環性に関する問題がある。管理プロセスは規範とそれからの逸脱の留意，逸脱の否定的評価，さらに問題の調整行動へと向かう一方向性を持つものと捉えられやすい。プロセスの各ステップには図 1 にあるようにそれぞれ分岐点があるが，調整行動にまで到る場合は一直線の流れとなっている。そこには規範自体の変容を考慮する余地がない。もちろんこれまでの管理プロセスを枠組みとした研究でも，しばしばプロセスの循環を指摘した研究（フェアブラザー 2000，木村 2011，Kato 2011）はあるが，まだそれほど大きくはなっていないように見受けられる。

また，管理プロセスに内在する問題点ではないが，接触場面における管理プロセスの非共有性についても，教育の観点から本稿では考えていく。

上記はミクロレベルの個人の中に生じる管理プロセスであったが，ミクロレベルの管理プロセスとマクロレベルの管理プロセスの往還に関わる問題もある。ネウストプニー（1997）は「すべての言語問題の基礎は談話のミクロプロセスにある」と述べており，ミクロレベルの研究をより重視している。しかし，ミクロレベルと行政や教育などのマクロレベルとの往還についてはあまり分析されてこなかったように思われる。本稿では今後の課題としてこの点についても若干触れる。

最後に，本稿では母語話者も非母語話者も接触場面の一参加者であると捉えるために，「母語話者」「非母語話者」という表現を敢えて使わないことにする。なぜなら言語教育の領域では暗黙のうちに後者は前者の言語能力に近づくための学習者としてのイメージを持たれるからである。かわりに本稿では「言語ホスト[1)]」「言語ゲスト[2)]」という用語を用いることにする。この用語の場合，言語ホストには言語ホストとしてのインターアクション参加の仕方があり，言語ゲストには言語ゲストとしてインターアクション参加の仕方があるとされ，どちらかが目標となるのではなく，接触場面においては同等の立場として捉えられるからである。英語母語話者の感覚から「ホスト」と「ゲスト」の区別がやはり何らかの立場の差を感じるという指摘もあるが（フェアブラザーとの私的会話から），現実の接触場面が，語学教室のように必ずしも一つの言語使用を前提とするものではなく，状況に応じて柔軟に媒介言語が変容することを

考えると，第二言語習得理論で通常使用される母語話者，非母語話者という表現を避けた方が適切だと思われる。したがって，より適当な代替用語が見つからない現段階では「言語ホスト」「言語ゲスト」を本稿では使用していこうと思う。

第２章では接触場面における規範の動態性について議論をし，第３章では管理プロセスの循環性と非共有性について議論をする。なお，これらの現象は密接に関連しているので，第２章で挙げられた個別の事例を第３章においても使用する。また，第４章においては今後の課題として，ミクロレベルの管理プロセスとマクロレベルの管理プロセスの関連について述べる。

２.接触場面における規範の動態性

本章では規範の動態性について議論する。規範の動態性については，後述するように生成プロセス[3)] に起因する場合と管理プロセスに起因する場合の２種類があるが，本章では管理プロセスに起因する動態性についてのみ議論し，生成プロセスに起因する動態性については稿をあらためる。

管理プロセスの各ステップは一定であっても，参加者の規範や問題認知のあり方は文脈依存的である。つまり，現実の接触場面においては，参加者は柔軟に状況に応じて規範それ自体やその適用の仕方を変容させている。接触場面研究にとってはこの規範変容のシステムの解明が重要な意味を持つと思われる。なぜなら，このシステムの解明によって，管理プロセスは接触場面参加者が問題や不十分さをどのように調整していくのかを説明する理論にとどまらず，接触場面では人がどのようにインターアクションを行っていくのかをある程度予測することができる可能性もあるためである。

規範の動態性について，Neustupný（1985）をもとに加藤（2010）は二つのタイプの分類方法を提示している。この研究は，同性同士で構成された12ペアの大学生同士，大学院生同士の一対一の接触場面をデータとしたもので，すべてのペアに初対面から１ヶ月毎に計３回の接触場面（20分間）が設定された。また，それぞれの会話後にすべての被調査者に対して１時間ずつのフォローアップ・インタビューが行われ，インターアクションの管理に関わる意識の確認が行われている。

上記の研究における動態性の一つ目のタイプは，さらに質的に異なる二つの領域に分けられている。一つはある接触場面における基底規範群の中に，どのような規範が選択されたり，新しく生成されたり，受容されたりするかに関わるものである。もう一つは，選択された個々の規範が，どのように適用されているのか，例えば顕在化しているのか潜在化しているのか，強く意識されているのか意識的に不使用になっているのかなど，適用の程度に関わるものである。

二つ目のタイプの分類方法は，加藤（2010）が同様のデータを生成プロセスと管理プロセスの観点から分類し直したものである。生成プロセスとはある接触場面における規範がどのように生成されるのかを示すものであり，選択された規範群がその場面における基底規範となる。

生成プロセス，基底規範，管理プロセスの関係は図２のようになる。まず生成プロセスで多

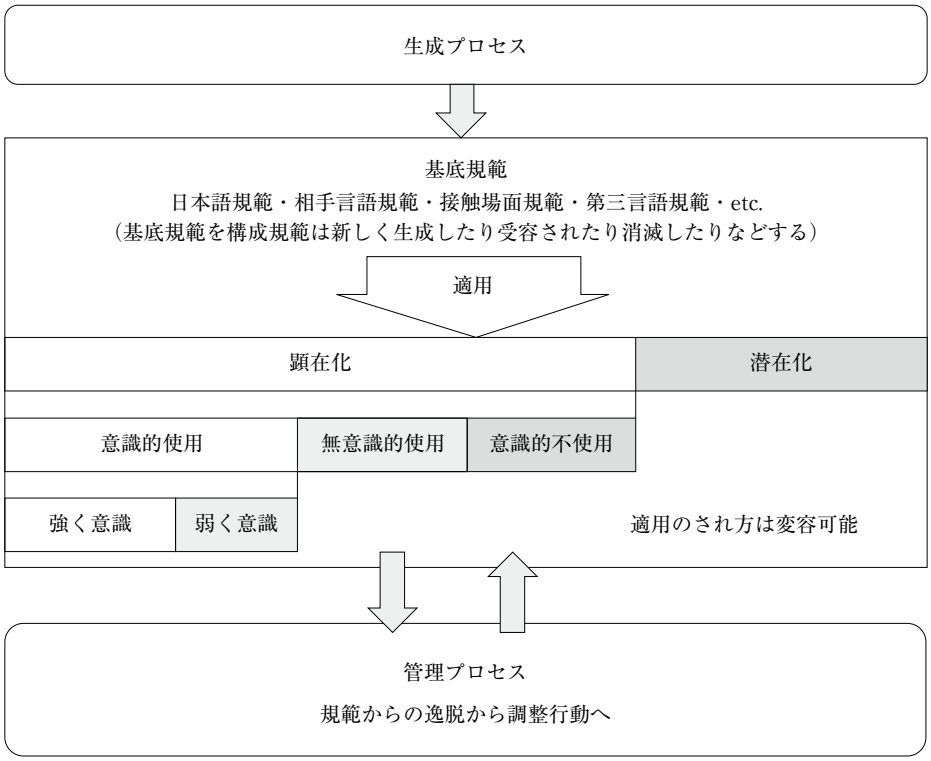

図２　生成プロセス，基底規範，管理プロセスの関連

様な規範が選択されて基底規範が構成され，そのいずれかの規範からの逸脱があった場合に管理プロセスが活性化する。基底規範内では構成する規範自体が変容する場合も，それぞれの規範の適用のされ方が変容する場合もある。動態性の一つ目のタイプに関して，加藤（2010）では基底規範内の動態性と，規範の適用の動態性を別々の領域として提示しているが，本稿では図２のように二つとも基底規範の枠内にまとめることによって，生成プロセス，管理プロセスとの関係の明瞭化を図った。なお，管理プロセスからも基底規範側に矢印が延びているが，後述するように管理プロセスからの循環を表している。

表１は上記二つの動態性タイプを，規範を動態させる要因との関係からまとめたものである。二つの動態性のタイプは，それぞれ別の現象を表しているものではなく，図２の中央にある基底規範の動態性が，生成プロセス，管理プロセスのどちらの影響を受けているかを示すものであるため，表のようにそれぞれの動態性タイプを縦軸，横軸に設定し，その組み合わせによって４分割することができる。表中の＜Ａ＞～＜Ｄ＞内の内容は，加藤（2010）によって規範の動態性を生起させた個別の要因とされたものである。例えば，＜Ａ＞の「逸脱の繰り返し・持続」は言語ゲストが言語ホストの規範から繰り返し逸脱した結果（つまり管理プロセスが活性化した結果），言語ホストが言語ゲストの規範をその場の基底規範の中に取り入れたりするような場合（つまり基底規範を構成する規範の内容が変容する）を指す。また，＜B＞の「逸脱の繰り返し・持続」は規範からの逸脱が繰り返された結果（つまり管理プロセスが活

性化した結果），規範の適用が徐々に強化されていくような場合を指している。

以下，アルファベットに従いそれぞれ具体例を加藤（2010）のデータから取り上げ説明をする。ただし，本章冒頭にも述べたように本稿では管理プロセスを中心に考察を行うこととし，＜A＞と＜B＞に限定し説明を行う。

表1　二つの規範の動態性タイプと，動態性を生起させる要因（加藤（2010）から作成）

	管理プロセスに起因する動態性	生成プロセスに起因する動態性
基底規範を構成する規範自体の動態性	＜A＞ ● 逸脱の繰り返し・持続 ● 問題発生 ● 以前の管理プロセスの影響	＜C＞ ● カテゴリー化の変化 ● 接触場面であること
規範の適用に関する動態性	＜B＞ ● 逸脱の繰り返し・持続 ● 問題発生 ● 感情の変化	＜D＞ ● 規範間，規範と期待の相互作用 ● 慣れ ● 新情報 ● 逸脱の繰り返し・持続 ● カテゴリー化

まず，＜A＞の「逸脱の繰り返し・持続」には下のような会話例が挙げられる。

初対面接触場面において，たまたま学科の先輩であった日本人男子学生J1は，後輩の中国人男子留学生C1の普通体使用やフランクな姿勢を否定的に評価していた。J1の否定的評価は第2回接触場面でも継続するが，第3回接触場面ではこれが相手国での先輩と後輩のつきあい方であると考えるようになり，その言語行動を受け入れ，逸脱とは見なさなくなった。このケースでは，当初逸脱が繰り返され，管理プロセスが否定的評価にまで継続して活性化していたが，結局，相手言語規範を自らの基底規範に受容したと言える。

下の会話例はこの二人の初対面会話の一場面である。この会話中，J1は後輩であるC1の普通体使用や身体行動を否定的に評価していたとフォローアップ・インタビューでコメントしている。

例1[4]（初対面接触場面）（C1：中国人男子留学生／J1：日本人男子学生）

C1：そうですか，＜笑う＞そうですか。・あ，じゃあ，じけんは，どういう，レポートたくさん出る？（肘をテーブルの上に置いている）

J1：いやあ，全然，試験を・微分，積分のテストだけかな。（両手を膝の上に置いている）

C1：あ，テストだけだ。

J1：うん。・・

C1：ああ，今，微分と，微分積分やってる：＜ああ＞けど，・ちょっと難しいな。（肘をテーブルの上に置きながら髪を触る）

次に＜A＞の「問題発生」による規範の動態性には次のような例が挙げられる。この会話は韓国人留学生K1が，発話したい語彙を知らなかったため，日本語での会話中に急遽母語規範（例2内の「クラクション」）を取り入れて会話を続けたという例である。これはコミュニケーション・ストラテジーの一種であるが，会話相手のJ1は韓国語をまったく知らない。し

たがって会話開始直後は，韓国語規範は基底規範の中に含まれていなかったわけだが，K2によると英語語源の韓国語は日本語でも理解される可能性があるため，とっさに韓国語を発話したということであった。問題発生によって基底規範の中に母語規範が取り入れられたと判断できる。

例２（第３回接触場面）（K2：韓国人男子学生／J2：日本人男子学生）

K2：なんというか，東京にいたら，車運転する時，クラクションとかはなんか，あまり聞こえない＜聞こえない，うん＞・ですけど，大阪・にいると，なんか，すごく，なんか，・聞こえるんですよ，また＜笑う＞。後ろからパ：パ：てきこ，あ，なに今って。＜笑う＞・（手振り）

J2：なに悪いことしたのって。

その他＜Ａ＞には，言語ホストが以前の接触場面でコミュニケーションがうまくとれず管理プロセスが活性化した経験があると，次の接触場面では，予め問題が生じないように新たな接触場面規範を生成してコミュニケーションに臨むという場合がある。

下の例は韓国人男子留学生 K3と日本人男子学生 J3の初対面会話である。この会話では，日本人学生は言語ホストとしてかなりゆっくりと明瞭に発話し，大袈裟ともとれるような身体行動を使って話している。この日本人学生によると，以前，留学生との会話でコミュニケーションがとれずに苦労したという経験をしており，今回の接触場面ではフォリナートークを初めから強く意識していたと述べている。この場合，以前の管理プロセスの調整行動の結果，接触場面における新たな話し方の規範が生成されたと言える。

例３（初対面接触場面）（K3：韓国人男子留学生／J3：日本人男子子学生）

J3：わたくし（左手を胸に当てる），わたしは（右手を胸に当てる）△△・○○・と申します。（ゆっくりと明瞭に）

K3：わたしは K3と申します。

J3：K3さん。

K3：は，はい。

J3：よろしくおねがいします。（お辞儀をする）

K3：よろしくおねがいします。（お辞儀をする）

J3：ええと，K3さんはおいくつですか？（手のひらで K3をさす）

次に管理プロセスに起因し，規範の適用が変容する場合の＜Ｂ＞について説明を行う。

これにはまず＜Ａ＞と同様，「問題発生」により規範の適用が変わった例が観察されている。会話例４は韓国人女子留学生 K4と日本人女子学生 J4の第３回接触場面での会話である。この回ではすでに J4は，日本語能力が高い K4や，場面自体に慣れが生じてきており，言語ゲストに対して易しい表現を使わなければならないとする言語ホストとしての規範意識が弱まっ

ていた。そのため会話中，「実写版」という語彙を使用した直後に，うっかり難しいことばを使ってしまったと後悔し，イントネーションを上げて理解確認を行ったとしている。J4は自分の次のターンで「実写版」を説明することによって調整行動を行っているが，この後，J4は再度上記の規範意識を強く意識するようになったと述べている。つまり，慣れによって弱まっていた規範意識が，問題発生によって生じた管理プロセスによって再び強く意識されるようになったと言える。

例４（第３回接触場面）（K4：韓国人女子留学生／ J4：日本人女子学生）

J4：あの，見てはいなかったんですけど＜はい＞，キャラクターとしては知ってて＜はい＞，でもなんか友だちで「キョンシー」大好きな人がいて，＜はい，ふふ＞で，あの，実写版（↗）（理解確認）

K4：はいはい。

J4：人間が演じてる。（軽く手を動かす）

「逸脱の繰り返し・持続」も規範の適用に影響を与える。下の会話はタイ人女子留学生 T1と日本人女子学生 J5の第２回接触場面の一部である。このペアでは，J5は初対面から頻繁に普通体使用を行っていた。ところが T1は基本的に丁寧体基調で発話を続け，J5 とはスピーチスタイルが明確に異なっていた。当初は J5も T1の丁寧体使用を日本語学習者であるからという理由で，留意はしていても否定的評価を行っていなかった。しかし，会話回数が増えても丁寧体使用に変化が見られなかったため，やがて「友達になりにくい」として否定的評価をするようになった。

つまり，J5は母語場面においては通常適用される同世代同士では普通体を使用するべきだという規範意識の適用を弱めていたが，逸脱が繰り返されたため次第にその適用を強めていったと判断できる。つまり，管理プロセスの活性化の継続が規範の適用の強化に結びついた例と言える。

下の会話は第２回接触場面の一部であるが，この例からも T1と J5のスピーチスタイルやあいづちのバリエーションに違いがあることが分かる。

例５（第２回接触場面）（T1：タイ人女子留学生／ J5：日本人女子学生）

T1：わたしはいろいろなカ，color はスプレー＜う，うん，うん＞でつくり，つくります。

J5：スプレーで？

T1：はい。

J5：は：。

T1：あの，mask は色がないです。

J5：ふん，ふん，ふん。

T1：はい，自分で作りました。

J5：じゃ，ま，撮ったあとに＜はい＞・また，こう，自分で色を。

T1：はい，はい，はい。
J5：は：。これはすごい。お，なんか，これはけっこう，ちゃんと見える。

また，問題発生による感情の変化が，規範の適用を意識的に不使用にさせる場合もある。下は中国人女子留学生 C2と日本人女子学生 J6の初対面接触場面である。この会話の直前に，C2は知り合いの日本人女性から聞いた結婚観を日本人女性全体に一般化し，J6に対して疑問を呈している。しかし，J6はこの発言に気分を害してしまい，下の会話例のように意味が理解できる程度の言語ゲストのローカルエラーを意識的に訂正している。教師であれば誤用訂正は失礼とは見なされないが，通常の初対面会話で直接言語ゲストの言語的誤用を訂正することは失礼と見られるであろう。この会話のフォローアップ・インタビューで J6 は「普通の会話だったら直さないと思うが，ここではムカムカしていたので，たぶん直してやろうと思って直したと思う」と述べている。この例は，ポライトネスの点から見て通常避けられるべき言語ゲストへの言語的誤用訂正に関する規範を，一時的に意識的不使用にしたものと考えられる。J6 は第２回，第３回接触場面ではこのような言語行動をとっていない。

例６（初対面接触場面）（C2：中国人女子留学生／ J6：日本人女子学生）
C2：あの，私の授業の中・で，ちょっと，あの，ビデオ見て，あ，なんでかな，よく考えて，あの，日本人，あの，私，あの，バイト・場所の，人によると，日本人は答えできないといわれて，…＜ J6，首をかしげる＞。
J6：答えられない（↗）。
C2：あ，答えられない。

ここまで管理プロセスに起因する動態性について説明したが，ここに挙げられた以外の様々な動態性を導く要因は当然存在すると思われる。しかし，観察対象とされた接触場面が，コミュニケーションを成立させようとする規範と，良好な対人関係を成立・維持していこうとする上位の二規範（加藤 2010）に従って進行するとするならば，基本的にその規範の枠内での変容であると考えられる。ここで見られたほとんどのものはその二規範に沿いながら，新しい規範を生成したり，相手規範を受け入れたり，また，規範が弱まりすぎていたら強化する方向に働いたり，規範が弱すぎると何らかの要因で強くなったりしていた。しかし，その結果として生起した規範や規範適用の状態が，その後も続くとは限らず，むしろ変容し続けると考えた方がいいであろう。問題なのは，規範の変容に付き合うことに疲労感が伴ったり，接触場面自体を避けてしまうようになったりする場合であろう。

まだ接触場面における規範の動態性をシステマティックに語ることが困難である現在，教育現場でできることは，言語ゲストのみならず言語ホストに関しても接触場面の動態性に対して，柔軟に自己を調整していける能力の育成にかかっているのかもしれない。

3. 管理プロセスの循環性と非共有性

この章では管理プロセス自体の特性である循環性について最初に議論する。次に個人の管理プロセスという観点ではなく，複数の参加者に存在する管理プロセスという点から考える。

3.1 管理プロセスの循環性

１章でも述べたように，管理プロセスは一方向性のプロセスを意味しているわけではない。管理プロセスの循環性についてはすでに指摘がある。例えばフェアブラザー（2000）は調整の段階から再び評価の段階に戻る「再評価」のプロセスについて言及している。この節では第２章で挙げられた例を用いながら管理プロセスの循環性パターンを確認する。また，管理プロセスは次節にも述べるように場面の参加者すべてに生起するものであるが，ここでは参加者のどちらか一方に生起した管理プロセスのみに焦点を絞って議論を進める。

第２章の会話例１では，後輩のC1の普通体使用やフランクな姿勢がJ1に否定的に評価されていた。否定的評価は第２回接触場面まで続くが，第３回接触場面では相手言語規範を自らの基底規範に取り入れている。したがって，図３のようなプロセスがあったと言える。また，図中の◎は新しい規範が組み込まれたことを示している。

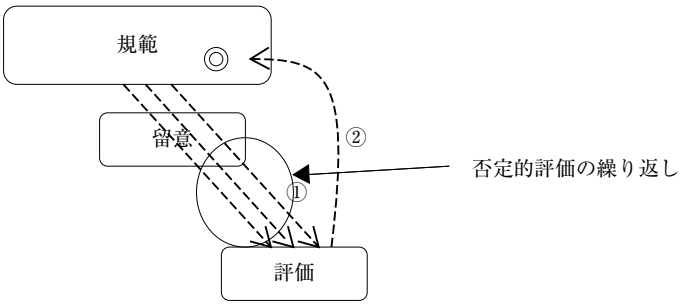

図３　J1におけるプロセスの循環

会話例２は，K2が言語面では日本語規範であった基底規範に，問題発現後，急遽母語規範を取り入れてコミュニケーションを続けたというケースである。この場合，調整行動の結果として，韓国語規範が取り入れられたことになるので，プロセスは調整行動にまで進んだ後に基底規範を構成する規範に変容があったことになる。図４の◎は基底規範の中に取り入れられた韓国語規範を示している。

会話例３も管理プロセスの調整行動の結果，接触場面における新たな話し方の規範が生成された例である。この時，J3は以前の接触場面における管理プロセスの経験から，言語ゲストには分かりやすい日本語を使わなければならないとする接触場面用の新規範を強く意識して会話を行っていた。この場合，コミュニケーション破綻という問題の事前調整行動が規範生成に結びついているので，会話例２と同様のプロセスとなる（図４参照）。ただし，例２と異なる点は，基底規範の中に新たに加えられた規範は，参加者の母語規範ではなく接触場面用の新規範

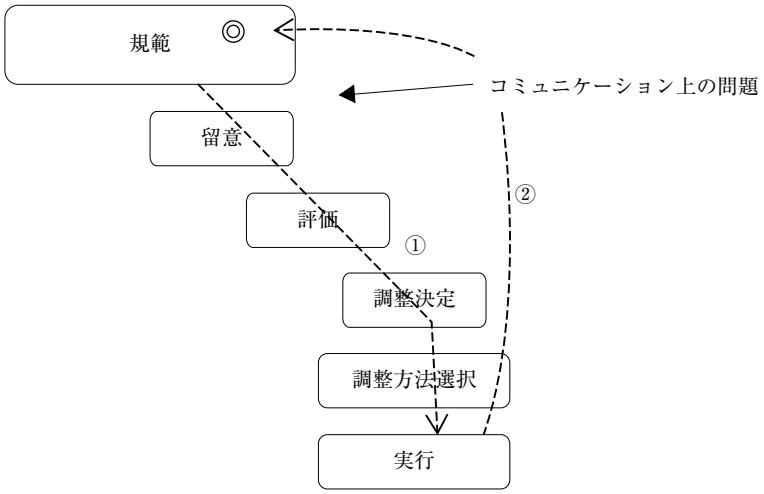

図４　K2及び J3におけるプロセスの循環

であったという点である。

次に管理プロセスを起因として，規範の適用のされ方に変容が起きた例について説明する。

会話例４は，一度慣れによって弱まっていたJ4の日本語使用に関する規範が，問題発現によって再度強化された例である。慣れによる規範の緩和は，規範の動態性の一つであるが，本稿では管理プロセスの結果としての動態性を扱うので，ここでは特に言及しない。図５内の「○→●」の意味は，規範の適用が弱い状態から強い状態に移行したことを意味している。

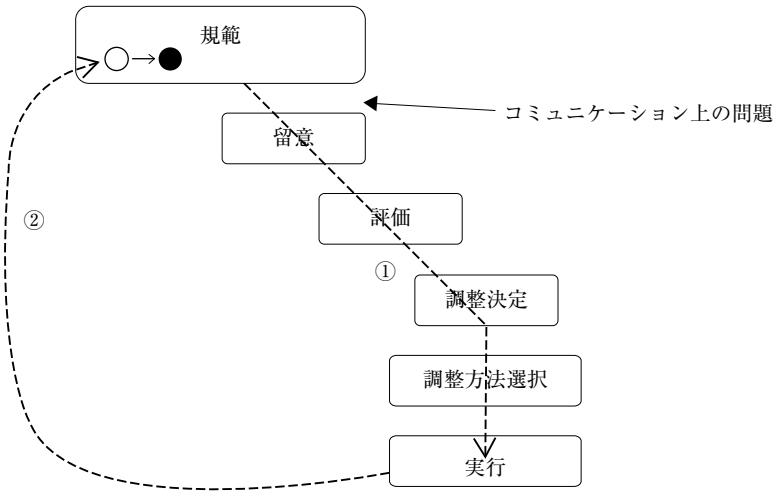

図５　J4におけるプロセスの循環

会話例５は，J5の持つスピーチスタイルの規範から，T1が逸脱を繰り返していた例であった。当初，J5は接触場面であることから規範を弱く適用していたので，プロセスは留意段階にとどまっていたが，逸脱が繰り返されたため規範の適用が強まり，その結果，否定的評価の段階にまで達したと判断できる。会話例４と同様，図６内の「○→●」は，規範の適用が弱い状

態から強い状態に移行したことを意味している。

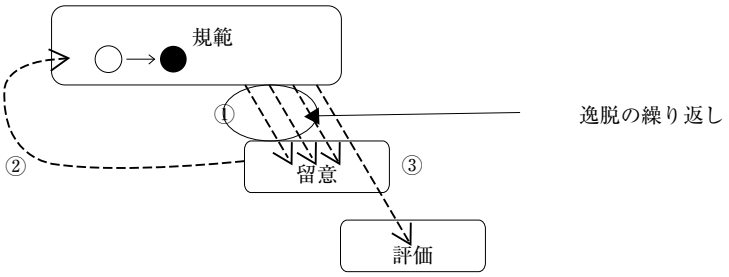

図６　J5におけるプロセスの循環

会話例６の場合，コミュニケーション問題ではなく，相手の発話内容に対する感情の変化が規範動態性の直接の要因となっている。このケースでは，ポライトネスの観点から言語ゲストのローカルエラーに対する誤用調整は回避するべきである，とする規範が一時的に不使用になっている。したがって，規範が意識されている状態から，一時的に不使用になった状態なので，図中では「●→○」と表現する。この場合，J6にはC2の発話内容が，初対面接触場面では不適切な話題と感じられたわけであり，話題に関する社会言語的規範からの逸脱があったと考えられる。それゆえ社会言語的規範からの逸脱が否定的評価の段階にまで進んだ結果，ポライトネスに関わる規範が意識的不使用となり，またその結果，言語的誤用の調整行動が起きたと解釈できる。

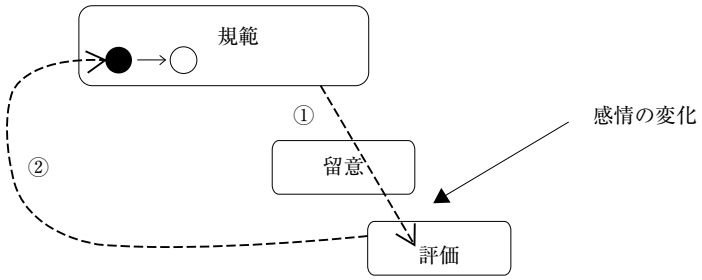

図７　J6におけるプロセスの循環

このようにプロセスのどの段階からも，基底規範の再構築や規範の適用のあり方は変容し得る。すなわち管理プロセスは常に規範からの逸脱が規範に沿うように調整される際のプロセスを表しているのではなく，逸脱や否定的評価の繰り返し，問題発生，感情の変化などの要因によって，規範自体の調整へも結びつくプロセスでもあると言える。

3.2　管理プロセスの非共有性

前述したように，管理プロセス自体が基本的にコミュニケーションの成立と良好な対人関係を形成しようとして実行されるものだとしても，それは必ずしも参加者間で協働構築されているわけではなく，自己完結型の管理プロセスであることも多い。つまり，個々の管理プロセスは必ずしも参加者間で共有されているわけではない。相手がどのような問題を感じ，またどのような調整行動をとっているのかは，異文化接触場面では一層共有することが難しく，必ずし

もお互いが満足する結果に持ち込めないという点にも注意を払う必要がある。たとえコミュニケーションを達成し，対人関係を考慮してインターアクションを行おうとしても，常に協働構築が行われているわけではないので，当該接触場面が双方に快適な方向に結びつかないかもしれない。本節ではこの管理プロセスの非共有性の問題について，会話例１のペアと会話例５のペアを使って説明したい。

管理プロセスの活性化は，接触場面の問題を解決しようとしたり，当該接触場面をより好ましいものにしようとする意識の反映である。無論，接触場面において異文化の人に対し排除や不当な批判を行う場合も何らかの規範の存在があったり，管理プロセスの結果であったりもする。しかし，仮に「共生」（岡崎2003）や「複言語主義」（福島 2008）といった理念に立てば，やはりこのような管理プロセスは悪性であり，そうではない管理プロセスが良性と呼べるだろう。当然，現実はそれほど明快ではないが，ここでは肯定的な管理プロセスが行われていることを前提として考える。

ただし，そのような前提に立った場合でさえも，言語的要素以外から来る様々な誤解や問題が生起し得る。それは当該接触場面のインターアクション中の管理プロセスが共有されていないことが一つの理由である。管理プロセスは一人の参加者のみにしか活性化しない場合もあるし，同時に多くの参加者に管理プロセスが活性化する場合もある。しかし，その場合も逸脱とするものが違ったり，到達するプロセスの段階が異なったりする。

下の図は管理プロセスが複数の参加者に同時に存在することを示すために，簡略化した管理プロセスを二段に重ねたものである。第２章で挙げた会話例１のペアを例にとってみよう。J1に否定的評価から規範受容を行うという管理プロセスが見られたのに対して，C1は先輩と後輩の区別をあまりつけない自国の母語規範に従っていたため，自分の言語行動がJ1の規範から逸脱をし，否定的評価を受けていたことに気づいていなかった。J1側も当初はC1に顕在化していた規範が中国の規範であったことに気づいていなかったために否定的に評価しているが，後に中国ではこうなのであろうと柔軟に考えることができたため，規範からの逸脱は消えている。

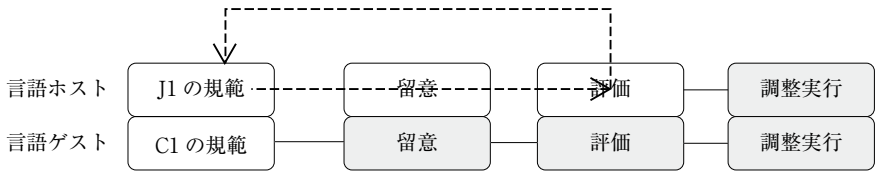

図８　J1と C1の管理プロセスの違い

また例５の場合，T1は自らの普通体使用に対して，留意はしていたものの，自分は留学生であるから仕方がないとして最後まで否定的に評価をしなかった。一方，J5は逸脱の繰り返しによって次第に否定的評価を行うようになり，最終的には友達になりにくいとして当該接触場面の維持が困難であることを示唆している（図９）。この場合もお互いの管理プロセスは共有されておらず，知っていれば何らかの調整行動が生まれた可能性もある。

また，加藤（2010）は接触場面では，通常母語場面の初対面では避けられる恋人や年齢など

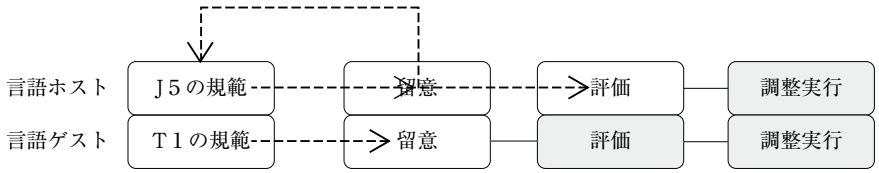

図９　J5と T1の管理プロセスの違い

のプライベートに関わる質問が，比較的早い時期に提出される傾向があると述べている。しかし，多くの参加者がそのような傾向を持っていたとしても，その早期化の程度は異なっており，恋人の有無を聞かれた言語ホストが母語場面ほど否定的には感じないものの，違和感を感じていたという例が紹介されている。この場合も接触場面における話題提出の特徴や相手の管理プロセスの傾向が分かっていれば，少なくとも問題を緩和させることができるかもしれない。

第２章で挙げられた例２や例４のようなケースでは，自分自身が自らの逸脱を調整するケースなので，共有の必要性は小さいかもしれない。しかし，上に挙げた例のように，管理プロセスが何らかの方法で共有された方が有益な場合もある。一般的にこういった情報は，教育現場では「接触場面ではこのような特徴がある」という宣言的知識の伝授という形で処理されることが多いと思われる。しかし，必ずしも宣言的知識として持っていればインターアクションが成功するとは限らないであろう。なぜなら規範自体が動態性を持っているためであり，したがって動態性に柔軟に対応できる能力も必要となる。

４.今後の課題：ミクロレベルからマクロレベルへの往路の開拓

第１章にも述べたようにネウストプニー（1997）はすべての言語問題はミクロの談話レベルから発生すると述べている。その言に従えば，行政，教育などのマクロレベルには，ミクロレベルにおける管理プロセスの反映がなければいけない。しかし，現在の言語管理理論では，ミクロレベルの研究は多いものの，研究成果がマクロレベルに十分反映されていないのではないかとの指摘もある（木村 2011）。

ミクロレベルに個人の管理プロセスがあるように，マクロレベルにおいても管理プロセスが存在する。両レベルが同じモデルで考察可能であることは，レベル間のインターアクションの説明を容易にするが，現段階ではこのインターアクションの分析は，言語管理理論が抱える今後の課題の一つだと言える。本章ではこのインターアクションのうち，ミクロレベルからマクロレベル，特に教育レベルへの往路について問題にしていく。

ミクロレベルとマクロレベルの往還の研究が必要である理由は，個々の接触場面のインターアクションはそれぞれの文脈の中で行われてはいても，マクロな社会や歴史の影響を受けていないはずがないからである。また，仮に研究成果を「共生」や「複言語主義」の理想に向けて役立てたいと思うならば，接触場面における談話レベルの研究は，その実現の妨げとなる何らかの問題を見いだせる場所だと言える。

この二つのレベルの管理プロセスを結ぶためには少なくとも次の三点から考えていく必要がある。一つ目は両レベルの管理プロセスを結ぶ道は「どのよう」にあるべきか，二つ目は設置された道を使って「何」をマクロに送ればいいのか，三つ目は「だれ」がそれらを運ぶのか，という点である。

一つ目の点については，そもそもミクロからマクロへの往路の設置を妨げる状況も存在している。まず，実際の教育現場では時間的にも人材的にも談話レベルの研究結果を教育に反映していくには制限があるし，同時に研究成果を教育に積極的に反映させようとする意識も強くないのではないか。また，仮に反映させようとしても，教育内容が言語面に偏っており，実際の接触場面で起こる社会言語面などを含む多くの問題点は後回しにされる可能性が高い。

さらにミクロな談話レベルの実体を教育に反映させていると思われる場合でも，現実の接触場面ではなく，シラバス作成者などの経験や予測に基づいた擬似的な接触場面が反映されていることも多いのではないか。

前述したように，マクロレベルにおいてもミクロレベルと同様の管理プロセスが見られる(図10)。この両レベルにおける管理プロセスを基礎にして考えると，ミクロからマクロへの往路は，ミクロの管理プロセスにおける調整行動の繰り返しが，マクロの管理プロセスの留意に結びつくことが多いと思われる。例えば，教室談話レベルにおいて，教師自身がある特定の誤用調整を多くしていると感じると，教育レベルにおいてその誤用を否定的に評価し，教育機関として予備教材を作成したり，新たな教科書を作成したり，新しいタスクを考案したりするなどの調整行動がとられる。図中の①の矢印はこの方向性を示している。

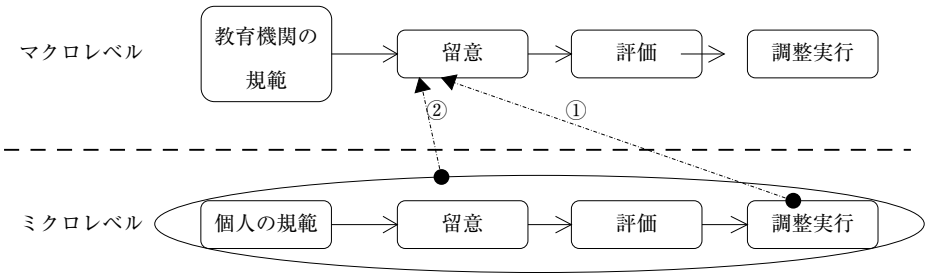

図10　ミクロレベルの管理プロセスからマクロレベルの管理プロセスへの往路

しかし，第２章で見たように現実には管理プロセスは調整行動に到らずに否定的評価で終わったり，規範自体が変容したりしてしまうことがある。このように潜在化している問題や規範の変容自体も往路で送られるべき内容と言える。したがって②の矢印のように管理プロセス全体を考慮に入れる必要があるだろう。管理プロセス全体を考慮するためには，研究者や教師などによって，接触場面参加者に対するインタビューやアンケートなどによる内省法が必要となろう。

第二に「何」をマクロの管理プロセスに送るべきかといった問題がある。無論，それはミクロの談話レベルでの研究成果がマクロレベルに送られるということであるが，前述したようにそれが擬似的接触場面からの情報ではなく，現実の接触場面からの情報でなければならない。接触場面からの情報としては，例えば初対面接触場面ではプライベートに関わる自己開示や相

手への質問の早期化が起きること，あるいはスピーチスタイルの差が引き起こす結果などが挙げられよう。ただ，すべての情報をマクロレベルに上げる必要はない。個人間の談話レベルで両者による調整行動によって解決される程度の問題であれば，マクロレベルにおける調整の必要性はない。

しかし，上記のような内容だけでは，単に接触場面に関わる知識として与える以外に教育的方法がない。つまり宣言的知識だけでは，動態的な接触場面でのインターアクションに失敗する可能性がある。接触場面における規範の動態性，管理プロセスの循環性・非共有性といった点もマクロレベルで留意されるべき問題である。そしてそれらの知見から導かれるマクロレベルでの調整行動は知識の伝達ではなく自己調整能力の育成ということにつながっていくのではないだろうか。自己調整能力とは接触場面において，管理プロセスを活性化させ，柔軟に規範の変容を行いうるような能力のことを指しているが，この点については Kato（2011）を参照されたい。

最後に，「だれ」がミクロとマクロの往路を通るのかという点についてみてみたい。

まず，ミクロレベルとマクロレベルの参加者が同一であれば，情報は容易にマクロレベルに送られ，また即座に問題解決のための管理プロセスが起きるかもしれない。例えば，教室内の教師が，シラバス作成者の一人であるような場合である。また，研究者がミクロな談話レベルを分析し，マクロレベルにおいては管理プロセスの一員として行動をとるような場合もある。ただし，マクロレベルの参加者とのコンセンサスがとれていないと，管理プロセスの実行者に加えられない可能性もある。

上の場合でも，単にミクロレベルで起こる管理プロセスの調整行動のみを見ていたのでは，潜在化している問題を見逃してしまう場合がある。したがって，レベル間を移動する参加者は単なる観察だけからの情報は避け，管理プロセス全体を視野に入れた研究活動，情報収集活動が必要になるのではないか。

また，接触場面の参加者自身がマクロへの往路を結ぶ当事者となる可能性もある。異文化接触場面がますます増えていく現代社会で，接触場面はより身近な問題となってくる。談話レベルで接触場面に関わる現場の人々が，マクロなレベルでの管理プロセスを活性化させようとする積極的な関わり自体も必要なのではないか。これは自己調整行動の一形態であると言えよう。

以上，この章ではミクロレベルとマクロレベルの往路について述べてきた。無論マクロの管理プロセスにおける調整行動がミクロレベルにおいて実行されるとき，マクロからミクロへの復路が必要になるわけである。今後，国家レベル，地方レベルにおける管理プロセスとミクロの管理プロセスとの繋がりも，繋がり自体がどのようであるべきかという点も含めて研究が必要な分野である。

5．結論

本稿では言語管理理論における管理プロセスに関して，より理論の精緻化を図るためにいく

つかの点について議論を行った。

まず，接触場面には二種類のタイプの規範の動態性が存在し，管理プロセスは循環することについて言及した。動態性や循環性が存在するということは接触場面自体が常に変容し，いずれかの方向に向けて発展し続けていくことを示している。つまり，管理プロセスは「問題」を解決するためだけのプロセスというよりも，問題解決を含め，より適切な接触場面における「秩序」を構築し続けるためのプロセスそのものであると言い換えられるのではないか。したがって，個人や社会がどのような基準で「秩序」を考えるかもまた重要になってくる。秩序の捉え方が異なれば，個人にしても社会にしても規範のありようが当然異なってこよう。しかし，その秩序に沿った管理プロセスの流れ自体は変わらない。こういった点からも管理プロセスを基礎としたミクロレベルとマクロレベルの往還の分析は重要である。

同時に規範の動態性や，管理プロセスの循環性・非共有性の存在は，接触場面に参加することの難しさの原因にもなっている。単に接触場面における傾向を宣言的知識として伝授したとしても，現実場面で応用できるとは限らず，さらに管理プロセスが活性化されていても異文化の参加者間で共有されていなければ誤解が生じることも多くなる。今後日常の様々な場面で接触場面を経験することが多くなることが予測される中，一人一人が知識だけではなく，柔軟なインターアクション行動を実行できる能力，自己調整能力の育成が必要になる。そこにマクロな教育レベルでの調整方法の考案とその実行が重要になってこよう。

最近，相互学習型活動（杉原 2010）が議論されることが多くなったが，接触場面自体が教育現場になることは意義がある。単に知識の伝授であれば，言語ホスト，言語ゲストのどちらか一方のみの授業で問題はないが，自己調整能力の育成であれば接触場面の教育現場が必要になろう。この中で管理プロセスをより活性化させるための内省を行ったり，管理プロセスを共有させるためのディスカッションを行うなどの授業法の開発が今後の大きな課題である。

過去約二十年の間，数多くの言語管理理論を利用した研究が行われ，今なお言語管理理論は理論的枠組みとして活用されている。これだけ長期間に亘り利用され続けるということは，その理論に内在する何らかの普遍性を感じるが，同時にこれまでにも多くの問題が指摘されている。本稿はこういった問題点を考慮しつつ，管理プロセスを再考したものであるが，それ自体もまだ多くの課題を残している。今後も言語管理理論の有用性を認めつつも，一層その理論の精緻化を進めて新たな展開を開いていかなければいけないであろう。

付録 1

表記	意味
・	短いポーズ
・・	3秒までの間
・・・	5秒までの間
（～秒）	それ以上は秒数を（　）内に書き込む
（？）	（　）内のクエスチョンは聞き取れないか不明瞭な箇所
（　）	（　）内は話し手の笑い，行動，表情などを補ったもの

＜　＞	＜　＞内は聞き手の笑い，行動，表情，あいづちなどを補ったもの
?	質問文
:	長音
⎮	発話が重なっている箇所
／	発話が遮られている箇所
―	前の話者の発話と次の話者の発話の時間的間隔がない箇所
（↗）	上昇のイントネーション
（↘）	下降のイントネーション

注

1）ファン（2006）は，言語ホストとは，当該接触場面で使用される言語のオーソリティであり，その認知的・言語的優位性から，会話を維持し相互理解を確立する責任を持つものと規定している。また，その対となるものが言語ゲストであり，認知的・言語的に劣位な立場にある。しかし，だからといって会話の管理は言語ホストのみが行うのではなく，言語ホストとしての会話管理があるのと同様に，言語ゲストとしての会話管理があるとし，会話の管理が両者の積極的な言語行動に依存するものであるとしている。

2）脚注1を参照

3）「生成プロセス」とは，コミュニケーションが開始される以前の「インプットのプロセス」から実際に発話されるまでの「表層化のプロセス」までを指している（ネウストプニー1999）。

4）表記方法に関しては付録を参照

参考文献

岡崎敏雄（2003）「共生言語の形成――接触場面固有の言語形成――」宮崎里司・ヘレン・マリオット共編『接触場面と日本語教育――ネウストプニーのインパクト』(pp. 23-44）明治書院

加藤好崇（2010）『異文化接触場面のインターアクション――日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』東海大学出版会

木村護郎クリストフ（2011）「私たちはどのように言語を管理するのか」山下仁，高田博行，渡辺学（共編）『言語意識と社会――ドイツの視点・日本の視点』三元社（pp.61-89）

杉原由美（2010）『日本語学習のエスノメソドロジー――言語的共生化の過程分析』頸草書房

ネウストプニー，J. V.（1997）「プロセスとしての習得の研究」『阪大日本語研究』９，1 -15.

ネウストプニー，J. V.（1999）「コミュニケーションとは何か」『日本語学』18- 6，4 -16.

ファン , S. K.（2006）「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈――学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性――』（pp.120-41）アルク

フェアブラザー , L. C.（2000）「言語管理モデルからインターアクション管理モデルへ」『接触場面の言語管理研究』１，55-65.

福島青史（2008）「日本の多言語状況と『複言語主義』――来日ウズベキスタン人の言語能力と使用領域調査から――」『早稲田大学日本語教育学』12, 29-44.

吉島茂・大橋里枝（他）訳・編（2004）「外国語教育Ⅱ　外国語学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠」朝日出版社

Kato, Y.（2011）The interaction between researches at the micro-level and education at the macro-level: An example of class focusing on management processes in contact situations. *Second International Language Management Symposium.*

Neustupný, J. V.（1985）Language norms in Australia-Japanese contact situations. In G. M. Clyne（Ed.）, Australia, Meeting Place of Languages（pp.161-70）Canberra: Pacific Linguisitics.

Jernudd, B. H. & Neustupný, J.V.（1987）Language planning as a focus for language correction. Proceedings of the International Symposium on Language Planning, 69-84.